

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

昭和初期における『老子』思想の研究について：
津田左右吉と長谷川如是閑の『老子』の研究を中心
として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Guo, Yongen メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1365

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



氏 名 郭 永 恩

本 籍 中 国

学位の種類 博士（学術）

学位記番号 乙第 6 号

学位授与年月日 2012年3月23日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項に該当

【昭和28年4月1日文部省令9号】

学位論文題目 昭和初期における『老子』思想の研究について

— 津田左右吉と長谷川如是閑の『老子』の研究を中心として —

審査委員 主査 神戸市外国語大学教授 小浜 善信

委員 神戸市外国語大学教授 山川 英彦

委員 神戸市外国語大学教授 丹生谷 貴志

委員 奈良教育大学教授 橋本 昭典

1. 論文内容の要旨 44

2. 論文審査結果の要旨 46

1. 論文内容の要旨

『老子』については、その発生地中国のみならず、世界各国においても研究が行われてきた。各国における『老子』研究の中では、日本の著書が最も多いことから、日本の『老子』研究に注目すべきである。

昭和初期（1925～1945）は、「支那学」の成立によって、日本の中国研究が新たな時代に入った時代であって、その『老子』研究もそれまでに見られない大きな業績を生み出した。この時期の『老子』研究では、校勘考学を用いて『老子』原典の復元に成功した武内義雄と文献批判による『老子』思想の研究によって新たな『老子』観を提示した津田左右吉は、『老子』研究の「双璧」といわれている。同時期の長谷川如是閑の「老子論」も高く評価されており、その『老子』研究をも無視できない。武内と違って、津田と長谷川両氏の『老子』研究の特徴は『老子』の思想を闡明するところにあった。そこで、筆者は、4編8章に分けて、津田と長谷川両氏の『老子』研究を考察し、それによって昭和初期の『老子』研究の特徴を一層明示しようとした。さらに、先行研究を踏まえながら、津田と長谷川の『老子』研究を加味して両氏の一貫した中国論、また日本文化論をも追究した。

第1編は、第1章と第2章から成っている。第1章では、筆者の「老子観」を述べた。『老子』には実に多彩な思想が含まれているが、その根本思想は、「無為自然」の「道」と「無知無欲」の「徳」であって、宇宙の理法と人間の道徳を示すものである。『老子』において、その「道」と「徳」が「無」と「有」をもって説かれている。その「無」と「有」について言えば、「無」は「有」を内含するという関係である。

『老子』の「無為」は「有為」を内包し、その「無知」は「有知」を肯定するような「無知」である。

『老子』においては、「道」・「徳」に到達する手段として「復」が提示されている。「復」とは人間の本源に立ち返ることを意味する。世間の平和と安定を希求するのが『老子』の追求する究極的目標であって、それゆえにこそ、その思想は恒久の魅力をもつものとして、古来尊重されてきたのである。

第2章では、日本における『老子』研究の軌跡をまとめた。老荘思想は、『老子』が伝わったとされる奈良時代の後期より早い時期に既に日本に入り、しかも道教的に見られていた。平安後期から室町時代までの日本では、老荘思想は、禅の力を借りて広く読まれ、従って禅的に理解される傾向が強かった。近世においては、『老子』は、『荘子』と異なり、儒教思想に合致するとされ、老荘思想から独立した思想として研究され、儒教的に解釈されているところに特徴がある。明治後期から大正期に至るまで、思想史等の方法による中国古典の研究が深まっていくうちに、近代「中国学」が成立した。それに伴い、『老子』の研究も次第に活発化するようになった。昭和初期に入り、校勘考学、文献学、社会学、宗教学などの近代的学問の方法を駆使し、専ら『老子』の思想性を追究する著書が相次いで世に問われたことで、日本の『老子』研究は未曾有の盛況を迎えたのである。

第2編は、第3章と第4章から成っている。第3章では、津田の『老子』研究を考察した。津田は、『老子』における「仁義」という併称に注目し、『老子』の思想を孟子の思想との交渉という観点から研究した。

そのうえで、彼は、論理的観点から『老子』の所説を詳細に分析し、『老子』には論理的に種々の矛盾がはらまれていると指摘した。彼は、『老子』の思想はあくまでも現実主義を志向するそれであって、決して形而上学的なそれではないとし、その政治・倫理に関する所説も思索的に空疎なものであるがゆえに、実践的意義のないものであると説き、その所説のうち実践可能なのはただ「保身の道」のみであり、『老子』の根本

思想は結局一種の消極的な利己主義であると結論付けて、『老子』の思想を徹底的に批判したのである。

第4章では、津田の道家思想研究の意図について探究した。中国思想研究を始めた津田の最初の研究対象となったものは道家思想であるということが指摘された。津田のなかには、道家思想の始原とされる『老子』の研究において、中国とヨーロッパにおける同研究と一線を画し、彼独自の、ひいては日本独自の『老子』研究法づくりが目的であるという意図が読み取れる。儒家と仏教による日本への影響は日本においても広く認められている周知の事実であるが、それより日本への影響が明確にされていない中国道家思想の研究によって最も中国思想の本質を明らかに示すことができ、それを通して日本と異なる中国思想のもつ特殊性を説明しようとする方法論的意図もあると考えられる。さらに加えて、彼は、古来の日本に大きな影響を与えた中国の儒家思想にも徹底的な批判を加えて中国思想の持つ異質性を一層明らかにしようとした。

それによって彼は、中国思想の影響と思われるものを排し、日本文化の独自性を主張しようとしたのである。

第3篇は、第5章と第6章から成っている。第5章では、長谷川の『老子』研究を考察した。長谷川は、津田がとったような論理的観点は『老子』研究には妥当ではないとし、『老子』を生んだ中国古代の社会状況を重視して『老子』を論じている。彼は、『老子』の思想は、その政治学を主軸にするものであると見て、その政治学は、きわめて現実的で、決して「論理のための論理」ではないと指摘したうえで、「村落自治体」を基本的社会形態とする「大国家」の実現が『老子』の究極的目標であるとし、『老子』思想のもつ実践的な意義を評価している。

第6章では、1930年前後の長谷川の言論を加えて、彼の思想におけるその「老子論」の意義を論じた。『老子』の政治学は、空想とか、ユートピアとか、無政府主義とかというものを説くのではなく、「国家」の存在を認め、しかも「大国家」の政治を究極的理想とするような思想であるというのが長谷川の「老子論」の主旨である。彼の「老子論」によって、先行研究では問題視されている1930年前後における彼の思想の一貫性が説明され、先行研究における彼の思想に関する諸見解も検証された。つまり、彼の『老子』研究こそ彼の思想の真髄を語るものである。

第4編は第7章と第8章から成っている。第7章では、津田と長谷川の『老子』研究から昭和初期の『老子』研究の特徴を明示したと同時に、その『老子』研究を加味して両氏の「中国論」を論じた。上述のように、昭和初期における『老子』の研究といえば、校勘考学による『老子』原本復元を果たした武内のそれ以外、津田と長谷川の「老子論」が示すように、『老子』の思想性を専らに研究する趋向も現れた。『老子』の思想については、あくまでも論理的観点に徹した津田の研究に対して、長谷川は、『老子』を生んだ中国古代の社会状況から『老子』を研究した。結論的にいえば、『老子』について、津田は徹底して批判的であったのに対して、長谷川は逆に高い評価を与えた。『老子』の思想に対して両氏は「賛否両論」に分かれたのである。しかも、両氏の「老子論」が示すように、支配階級の思想を批判する点では、両氏は一致している。両氏の中国論に関して、従来の研究では見落とされてきた両氏の「老子論」を加えて考察してみると、津田は中国文化を「一元論」的と見るのに対して、長谷川は「二元論」的と見るということが両氏の一貫した見方であることが分かる。津田は中国思想を日本思想と比較することによって、中国思想が異質な思想であると論断した。長谷川は、中国のこの「二元論」的構造が原因で、近代中国の革命は失敗の命運を免れなかったと分

析し、中国思想を特異性のある思想と指摘した。

第8章では、両氏の日本文化論を論じた。明治ナショナリズムの影響を受けた両氏が、『老子』を論じ、さらに中国思想全般を論じる根本的意図が日本国内の問題解決ということにあったのであり、両氏の中国論は結局のところ日本研究のためであったといえる。長谷川の「国家批判」と津田の「否定の史学」をみてわかるように、両氏の日本研究は批判精神を基にして展開された。長谷川は、「国家の社会化」思想を主張し、明治以来その国家機能が拡張されつつあった国家的形態を厳しく批判し、「大正論壇一方の雄」と評価されている。津田は、中国思想をもって日本の国家および社会の道徳を唱える近代日本の思潮を強く反駁し、中国思想の影響を受けた日本思想に対して厳しい批判を加えていた。両氏の日本批判は、いずれも「生活」から遊離する国家的道徳への批判であって、その終局的目標は近代主義に基づく「日本文化の自立」ということにあった。

以上要するに、津田と長谷川の『老子』研究を考察することによって、昭和初期における『老子』研究は、武内の校勘考学による『老子』原典の復元研究のほか、『老子』思想を深く追究するという特徴があることが指摘された。両氏は、それぞれ論理的観点と社会学的観点から『老子』思想を研究したが、その思想の評価については賛否両論に分かれた。両氏の『老子』研究をさらに追究していくと、両氏がともに支配階級の思想を批判するという点で一致することも判明した。また両氏は、中国文化については、それを「一元論」と「二元論」というように、違う捉え方をする一方で、中国思想のもつ異質性を指摘した点においても全く同じであった。両氏の日本研究を見て分かるように、近代日本の国家機能が無限に拡大されつつあったことを批判し、「国民思想」を中心とする近代主義に基づく日本文化の創立を目指そうとしたのが両氏の日本文化論である。つまり、老子論・中国論・日本文化論についての両氏の学問は、結局日本文化の創造を究極的な目的に据えていたものと理解される。とりわけ1930年代から日本に巻き起こった西洋に対抗する狂信的な「日本精神」に対して、両氏がそろって批判を加え、優秀な文化との交流によって日本文化をいっそう発展させるように呼びかけ、「国民思想」を根底とする近代主義に基づいて日本文化の改造を主張していたことから見ても、両氏の学問の根底にある意図は日本文化の創造という点にあったといえよう。